

工藤慎太郎(編著)

運動器疾患の「なぜ？」がわかる 臨床解剖学

板場英行

(川田整形外科リハビリテーション科統括部長)

医学書院から、理学療法士である工藤慎太郎氏の編著による『運動器疾患の「なぜ？」がわかる臨床解剖学』が出版された。理学療法士養成校で学生教育に専念し、現在は運動器疾患の理学療法を臨床で実践している立場から本書を書評する。

骨・関節・筋系障害の運動器疾患理学療法は、理学療法業務の根幹的存在である。理学療法士は、運動機能障害を有する対象者(機能障害に関連する活動制限、参加制約を含む)に対峙し、何を評価し、どのような治療を行うかを最初に考える。

理学療法の対象はヒトであり、理学療法士が実施する理学療法は、失敗の許されない最大効果の治療帰結に向けたスキルとアートの集積である。対象者に対する的確で最良の理学療法を提供するためには、臨床における諸現象を憶測や経験に頼ることなく、得られた臨床データから推論した仮説に基づいた治療介入と再評価を通して、仮説の証明・棄却を行いながら対象者の問題を論理的に解決するプロセス(臨床推論)を構築する必要がある。

この臨床推論能力獲得には、臨床実践の基盤となる「ものの考え方」を堅持したうえで、さまざまな次元(知識・認知・超認知)で推論、検討、考察、思考、決定する自己能力の涵養が要求される。臨床推論過程は、理学療法士養成校や卒前の臨床実習において、相応の教育・指導が展開されるが、その確立には国家資格取得後 10 年以上の持続した臨床実践に基づく自己研鑽

が必要とされる。

日々の臨床の中で、「なぜ？」という疑問をもち、その解決に向け、最良の判断/判定/考察/対応ができる専門家が理学療法士であるといえる。

運動機能障害に対する理学療法は、的確な障害評価分析(3 モデル：運動学的、病理運動学的、運動病理学的)をもとに、関連学際領域(3 学際領域：機能診断学、障害分析学、臨床判断学)を駆使し、統合的・包括的治療(3 根拠治療：実践的、科学的、叙述的)に向けた治療方略が必務である。

本書は、理学療法士が日常の臨床で担当する頻度の高い 20 例の骨関節系運動器疾患に対し、臨床徴候や障害像を解剖学的視点から考察、解釈、説明したものである。執筆者は臨床に従事する傍らで、学生時代に解剖学書で学んだ「人体地図」の再学習を実践し、その学問的基盤をもとに運動器疾患の運動療法を見つめ直している。

その内容は、肉眼解剖学的見解を中心に、病態解剖学、臨床運動学、運動機能障害分析学を包含している。1950 年代から最新のものまでの有益論文を参考・引用し、「なぜ、そのような臨床徴候が発現しているのか」を臨床解剖学的見地から説明し、理学療法治療への示唆を提示している。

日常業務に忙殺されて看過しかねない問題や疑問に対して、解決の糸口を与えるセラピスト必携の一冊である。読者となるセラピストには、本書に記載されていない疾患に対しても、直面する臨床徴候の発現機構を考える「臨床的くせ」をもち、その臨床的集積が臨床推論能力の向上につながることを望む。

●B5・232 頁・2 色刷

定価 4,830 円(本体 4,600 円+税 5%)

2012 年 医学書院刊